特集

キッズ委員会の取り組み
シニア委員会の取り組み
技術委員会の取り組み

【キッズ委員会】

キッズから小学校へ　キッズ理解者とサッカー普及のため

キッズ委員会　委員長　　遠藤　祥悦

キッズ委員会では、３本柱を根気よく粘り強く行っている。キッズ巡回指導 U6（幼稚園、保育園などへのサッカー指導）JFA キッズサッカーフェスティバル U6U8U10　キッズリーダー養成講座　U6,U8,U10、ALL　の3つを中心に、キッズ理解者とサッカーの普及にと行っています。各地区での成果もあり、徐々にではありますがサッカーの普及に貢献出来ています。また、インストラクターやキッズ委員長のご理解が多くなっていると考えています。　ここ最近では、キッズリーダー養成講座に大学生や高校生の受講者も増えて、キッズに対する理解者が多くなった。高校生や大学生は、各地区のフェスティバルやユニクロサッカー教室などにも参加して幼稚園保育園児と交流する場が徐々に増えてきました。これもひとえに指導者のあってのことだと考えています。フェスティバルに参加した選手は、とても生き生きと園児たちと触れあい、サッカーを通して人間的にも成長している姿を見させていただいています。

JFA キッズサッカーフェスティバル U6U8U10 では、参加者も回を重ねるごとに増えています。ゲーム中心のフェスティバルからグラスルーツ形式のフェスティバルに変わってきて、より一層テクニックや楽しさを感じている選手が多い。楽しさとサッカーの質の部分を追求しながら行うフェスティバルは、保護者の皆さんも満足していることでしょう。

キッズリーダー講習会では、受講者の皆様が、身体を動かすことの楽しみを子どもたちに伝えてボール遊びの中からサッカーを知って頂けたら、サッカー人口は増え、北海道のサッカー界は明るくなると思っています。

子どもたちには、まず、身体を動かす（様々な動きを使い遊ぶ）楽しみを伝えます。子どもは遊ぶことが大好きです。その遊び心を大切にして、鬼ごっこなどで仲間、コーチと関わり、次第にボールに触れ、足で蹴り、止める、運ぶといった動き作りを実践していきます。そして最後はゲームをするという段階を踏みながら進めています。

子どもたちの中には、サッカーボールに触れたり蹴ったりすることが、初めてな園児もたくさんいます。また、ボールを投げることが出来なかったり苦手な子もたくさんいます。動き自体もまだぎこちない子もいます。遊びの中から、身体の使い方を覚えることは、サッカーをする・しないに関わらず、園児たちの成長のためにとても大切だと考えています。多くの園児たちにサッカー遊び（サッカー）をしてほしいという気持ちはもちろんあります。でもサッカーを通して、動き作りなどの力になれればと思っています。将来他の競技を選択し他のスポーツをする園児もいますが、サッカー（サ

ッカー遊び）で学んだことが役に立っていると気づいてもらえたら嬉しいなと思っています。

幼稚園・保育園では、多くの園に回って体を動かす楽しみやサッカーの入り口に触れる事によって楽しみを感じています。巡回指導の指導者の指導法も工夫されていて、今まで以上に園児たちが運動している姿を見る事が感じられる。今年度は、新規事業で幼稚園・保育園講習会（60 分程度）を計画し、よりわかりやすく簡単にサッカーの指導が出来るような方法を伝えていきたいと考えている。

TOYOTA との共同の巡回指導においても、取り組みに理解することが多くなり、今年度も参加トヨタさんがありました。継続して JFA と協力しながら取り組みの理解者を増やして子どもたちに積極的に関わってもらいたいと思っています。

キッズ巡回指導のキャラクターサッちゃん、カーくん

【シニア委員会】

シニア種の現状と今後について

シニア委員会　委員長　佐藤　英隆

1.シニア委員会について

新型コロナウイルス感染拡大の影響が顕在化した 2020 年 4 月からシニア委員を 2 年経験後、2022 年 4 月からシニア委員長に就任し今期で二年目を迎えました。シニア種は北海道シニアサッカー連盟（2020 年 4 月から連盟理事長に就任し、現在シニア委員長と兼務）があるため、他カテゴリーの委員会とは異なり独自性を有しています。

シニア委員会は、委員長 1 名、副委員長 2 名、各地区担当委員 8 名、1 種・社会人の委員長、審判委員長、担当副会長の合計 15 名で構成され、1 回/年開催しています。 また、委員長及び副委員長をはじめ、ほとんどの委員がシニア連盟の役員も兼務しております。両組織の役割分担を特に定めたものはありませんが、あえて区分すると、シニア委員会が後述する道協会主催大会のレギュレーション素案作成や道協会とシニア連盟のパイプ役になっているのに対し、シニア連盟は事業の企画・運営などを行う実働部隊といったところでしょうか。シニア委員会及びシニア連盟の地域区分は、道央ブロック、道北ブロック、道南ブロック（函館地区、室蘭地区、苫小牧地区）、道東（十勝地区、釧路地区、オホーツク地区）の 4 ブロックに区分しています。

2.道協会（シニア種）主催大会（シニア連盟と共催）について

シニア委員会及びシニア連盟では、全国大会予選となる真剣勝負の全道大会やサッカーを楽しみ親睦を深める大会など、競技志向に応じて大会の企画・運営を行なっています。

●全国大会予選となる真剣勝負の大会

・全道シニア O-40／50／60／70 サッカー大会

●サッカーを楽しみ親睦を深める大会

・全道シニア 8 人制オープン大会、

・北海道シニア 8 ツアーオープン大会

・北海道シニアオープン大会

・全道シニアフットサルオープン大会

2021 年度と 2022 年度の事業実施状況については、コロナ禍であっても中止事業をなんとか最小限に留め、感染防止対策を徹底した上で、全国大会に繋がる全道大会などの主要事業は継続して実施する事ができました。

3.シニア種の登録状況

シニア種の登録状況は、JFA がシニア種登録を開始した 2000 年に 11 チーム・340 名でスタートしたのち、増加の一途をたどり、2023 年度には 128 チーム・2600 名程度になる

見込みで今後も増加することが予想されます。

4.今後の展望・課題等

サッカーが生涯スポーツと言われて久しく、シニア種の活動領域がより一層広がることが予想されるため、シニア部門のサッカー環境を充実させ持続可能な体制とする必要があると考えています。そのため、以下の項目などを当面の課題と考え、各課題に対し、座長、構成員、オブザーバーで構成する少人数のワーキンググループ制の勉強会をシニア連盟内で実施しているところです。

検討方針としては、現状把握（分析）・課題（目標）の設定（今後あるべき姿、どういうふうにしたいか）・問題点（ボトルネック）の抽出（課題を実現（目標を達成）するための問題点の抽出・解決策（解決の方向性）・具体策といった観点から、各々関連付けて検討し、今後のシニア種の活動に活かしていきたいと考えています。

【勉強会における検討課題】

●10 年後のシニア種のあり方

シニア種のチーム数及び登録者数の増加や限定されるグラウンド数を踏まえ、今後のシニア種のあり方・方向性について検討。

●シニアカテゴリーの普及

サッカー継続者だけではなく、①未経験者、女性、健康維持が目的の方、②仕事や子育てなので一度サッカーから離れていたが、セカンドライフとしてサッカーを楽しみたい人、③お子様のサッカーを見て自分もやってみたいと思っている方、④サッカーをやってみたいけどいきなりチームには‥と思っている方なども取り込み、競技志向ごとのニーズにあったサッカー環境を造設し、シニアサッカーの普及に繋げる方策を検討。現在までに実施中または検討中の企画を以下に示します。

・シニア練習会・・・一昨年から実施している企画で、毎週火曜日の夜にアンフィニ盤渓サッカー場でシニアを対象とした練習会を実施中。練習会の案内はシニア連盟 HP に掲載。

・金田喜稔氏の「大人のサッカー教室」

元日本代表レジェンドの金田喜稔氏が全国展開している企画で、道協会ではシニア連盟と共催で 2021 年に札幌で 2 回、十勝で 2 回、苫小牧で 1 回実施した実績がある。今後も機会があれば実施を検討。

・出身高校サッカー部 OB 交流大会・・・2 年前に JFA が千葉県で試行的に開催した企画で、昨年、他府県（静岡、愛知、鹿児島、広島）でも開催。高校サッカー部 OB は帰属意識や仲意識が高く、他府県でも好評だったことから、北海道でも開催を検討中。

●女子部門との連携

●審判スキルの向上及び資格保持者の増強、

●道外地域との交流

【技術委員会】

「Japan's Way」が目指す未来の実現を
道内のサッカー仲間とともに

技術委員会　委員長　上田　充士

2022 年 7 月に JFA は「Japan's Way」を発表しました。ご覧いただいていない方には、ぜひ目を通していただきたいと思います。（https://www.jfa.jp/japansway/）

これは、JFA2005 年宣言において設定した「2050 年までにサッカーファミリーを 1000 万人にし、FIFA ワールドカップで優勝する」という夢を実現したときは、日本サッカーはどのような状況になっているのか、その「ありたき姿」から逆算して、現在とのギャップを埋め、そこに至る道筋として示したものです。

技術委員会では、その目標の実現に向けて、「強化」「育成」「指導者養成」「普及」の四位一体の取組を行っています。

「強化」部門の最大の目標は、何といっても北海道で生まれ育った選手が、世界の大舞台である FIFA ワールドカップのピッチで活躍する姿の実現と考えています。

過去にこの舞台に選ばれたのは、城彰二（中 1 夏まで）、熊谷紗希（中 3 まで）、髙瀬愛実（高 3 まで）、三宅史織（小 6 まで）の 4 選手にとどまっております。北海道は、全国の 1/20 の人口と考えると、毎大会選考されるような FA でありたいと考えております。そのためには、プロクラブである北海道コンサドーレ札幌との連携を大切にするとともに、選手のゲーム環境やトレーニング環境の充実に取り組みます。

また、国体男女成年の部については、現在は直接関係しておりませんが、北海道の選手が全国の舞台で好成績をあげられるよう惜しまず協力していきます。

「育成」部門については、U-16 国体男女少年の部を集大成の大会としてとらえ、地区、ブロック、北海道地域、ナショナルの各トレセン活動の充実を図っております。U-11 年代でトレセンが始まるときに子供たちは、「将来はプロ選手として活躍したい」と大きな夢を持ち参加します。どの年代においても、地区トレセンがベースとしてあり、切磋琢磨され上位のトレセンに選ばれていきます。その選考の際に大切にしたいのは、現在、上手な選手だけではなく、将来性豊かな選手も見逃さないことです。子供の成長には大きな個人差があり、特に、早生まれの選手や体の成長が遅い選手の中にも光る才能を持つ選手がいます。その資質を見逃さず、切磋琢磨する中で様々な刺激を受けられる機会を大人がコーディネートすることが重要だと考えます。

更に中学生年代からは、世界の舞台でも活躍できる選手を育成するため、必要な資質・能力を身につけさせられるようチーム関係者と連携を図りトレセンに取り組みます。現

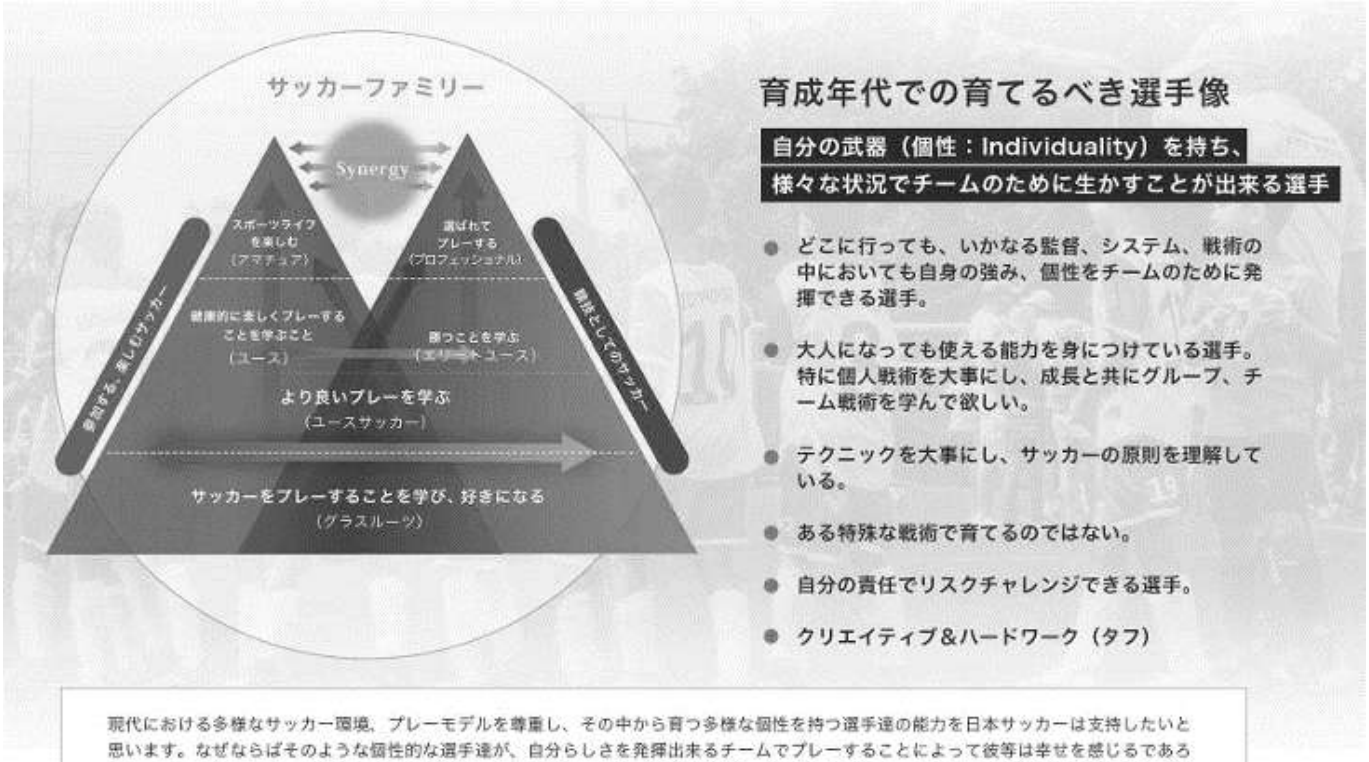
在、世界で活躍する選手の多くは、17 歳で国内のトップリーグでレギュラーとして活躍しているといわれています。そのためには、常に自ら考え、判断したり、自分の長所を伸ばしたりできる選手の育成が大切であると考えます。また、選手の日常環境であるリーグ戦環境を整えることも我々の大切な役割だと認識し取り組んでおります。

四位一体の活動を支えるのは「指導者養成」部門です。子供たちに携わる指導者一人ひとりが、経験や我流に頼るのではなく、常に学び続ける姿勢をもち選手の前に存在することこそが、北海道の未来を変えていく力だと確信しています。学び続ける指導者は、常に選手から信頼され、そして、各地区でもいいゲーム環境を構築できるよう、不断の改善に中心となって取り組んでいることと思います。

北海道 FA では、毎年 B 級指導者を 50 人養成できる体制を構築しております。また、各ブロックでも様々な工夫をして、C 級や D 級の指導者養成コースを開設しております。チームの指導のほかにも、審判、トレセン活動を行い、更に熱い思いを持って指導者養成に尽力していただいているチューターの皆さんの支えがあり実現しております。

最後に「普及」部門です。10 年前と比較すると、道内のチーム数・登録数は 7 割ほどまでに減りました。現在、北海道内の高校生の数は、1 学年 4 万人ですが、10 年後には更に 1 万人の減少が予想されています。子供だけではなく、1 種年代の減少、札幌圏外の地方の減少も大きくなっています。

「Japan's Way」には、これからのサッカーを「あの人たちがやっているサッカーからみんなのサッカーへ」ということばで締めくくられております。北海道でサッカーをやりたいと思う老若男女すべての人にとって、サッカーができる環境を再構築することは喫緊の課題と考えます。すべての世代にリスペクトの輪を広げ、「する」「みる」「関わる」サッカー文化、スポーツ文化の醸成に、技術委員会の枠を超えて、皆さんと力を合わせて具体的な取組を推進していきたいと考えております。



現代における多様なサッカー環境、プレーモデルを尊重し、その中から育つ多様な個性を持つ選手達の能力を日本サッカーは支持したいと思います。なぜならばそのような個性的な選手達が、自分らしさを発揮出来るチームでプレーすることによって彼等は幸せを感じるであろうし、また日本サッカーの強みでもある組織力と団結力を見せたときに"多様性と一体感の共存"によって大きな力を発揮するだろうと考えるからです。今後才能を持った選手の発掘（Talent ID）に関しても日本サッカーとして求める基準をしっかりと示していかなければならないと考えています。